

幼稚園における漢字教育

森岡:狼少年などの例もありますけれども、言葉は必要な時期に覚えそこなうと、ものになりませんね。いまのお話を伺いまして、漢字を早期に教える方が能率の上がるということはよくわかるのですけれども、幼稚園の大体何歳くらいのところが漢字指導の適齢期に当たるのでしょうか。また、漢字教育をしている幼稚園では、いま何字くらいを目標にしているのでしょうか。

石井:幼稚園によって、三年保育、二年保育、一年保育があり、私はその種類によって段階をつけています。大体一年間に三百字程度 小学六年生は190字ですからずいぶん多いですけども は覚えてしまいます。

森岡:三年保育ですと……。

石井:一千字くらいですね。一千字覚えますと、いまの中学生以上です。ですから本を読む力はものすごく出てきます。湯川秀樹さんの伝記を読みますと、三歳の頃におじいさんから『四書五経』を教わって、後年非常に自分のためになったとありましたので、一般にどの程度にやれるものか、いま私の研究所で幼

児に実験的に『論語』を教えています、もう非常に興味をもって覚えますし、すらすらと読みますね。

森岡:日本の国語教育ですと、漢字は文章の中に出てきたときに教えるやり方をとっておりますね。それに対して「鳥」のはいつている字を集めるとかして漢字だけを教える方法があると思いますが、どちらが能率が上がるのでしょうか。

石井:単に漢字そのものを覚えるという点からは、漢字だけでやる方が能率がいいと思います。しかし、一概にどちらが良いとは言えないと思います。

森岡:さっきのお話の「手を洗う」の場合、このやり方ですと文脈の中で教えるということですね。

石井:そうですね。

森岡:その他に、虫偏とか、同じ偏のつくものだけ集めて教えられることもあるのですか。

石井:そういうこともやっております。ただその場合、最初に「虫」という字は教えません。「蟻」とか「蜂」とか、そういう具体的なものから教えます。「虫」という虫はいませんし、「鳥」という鳥はいませんので、幼児には理解しにくいものです。いままではそういう

字から教えていましたけれども、私は逆だと思います。

森岡:つまり字形の複雑なものからですね。それから、いま伺っていますと具体的なものの名前の字がいっぱい出てきますけれども、抽象的な動詞や形容詞はいつごろからお教えになるのでしょうか。

石井:ある程度名詞が覚えられるようになりますと、もうどんどん文章にはいります。私が監修している幼稚園の教材に花園文庫という漢字絵本がありまして、毎月一回出すのですが、「舌切り雀」だとか「かちがち山」の物語が一冊ごとに収まっています。名詞がある程度覚えられるようになりますと、その言葉を使った物語を与えてやりますと、子どもは前後の関係で教えなくても読むのです。たとえば「嵐」という字がわかっていると、「嵐が起りました」と結構読むのです。最初はもちろんそういう物語を読んで聞かせるわけです。何回か読んで聞かせますと、幼児は文章を覚える力が非常に強くて、物語をそらんじてしまいます。そらんじてしまいますと、難しいはずの仮名でもいつの間にか覚えてしまいます。ですから最初は具体的な漢字を教えますけれども、ある程度までいきますと、文章をいきなり与えま

す。どんどん楽しんで読みますから、自分で字を覚えるようになります。

森岡:幼稚園で書くこともなさるのですか。

石井:いまのところ、書くことはしておりません。ですが、三年保育の場合などは、見ておきますと絵でも何でも実に見事に画くのです。それで幼稚図によっては筆で字を書かしているところがあります。それは見事な字を書きます。ですから、そういう指導もやった方がいいと私は思っています。それも鉛筆ではなく筆でやりますと、子どもは喜んでそれは見事に書きます。

森岡:もう一つだけ。高学年で漢字を教えるのは何歳ぐらいからだが無駄だと思いですか。(笑)

石井:いやあ、それは私は無駄はないと思います。私のような年になっても、しかも漢字を専門にしている、読めない字、わからない字がありますからね。私はそれは一生の問題だと思えますから、終りはないと思います。